

「舞台」は元禄文化と関連がなく、組織が不適切である。



〇風神雷神図屏風(伝墨江遺傳、東京国立博物館蔵)



〇日光東照宮(栃木県、世界遺産) 豪華な建で物で、陣山文化を受けついでいる。

町人の文化 江戸時代も17世紀の半ばから18世紀のはじめごろ、大阪や京都の上方を中心に商業が発達し、町人が力をもってくると、文化のようすが大きく変わってきた。

大阪の町人井原西鶴は、「日本永代蔵」という小説に、みずからの才能と努力で成功する町人のすがたを、「大商人になった女性」の物語として紹介している。このような小説は、浮世草子とよばれた。人々のあいだでは、歌舞伎や人形浄瑠璃が流行し、近松門左衛門はその脚本に多くの名作を残した。松尾芭蕉は俳諧を芸術に高め、人々に広めた。

京都の俵屋宗達は、装飾画に新しい流れを生み出した。江戸の菱川師宣は、浮世といわれた江戸に見られる町人の風俗を好んでえがいた。浮世絵のはじまりである。浮世絵は、やがて、版画として大量に印刷され、安い値段でたやすく手に入れることができるようになり、多くの人たちに愛好された。これまで公家や大名のためにえがかれることが多かった絵画も、人々の身近なものになった。

このように、元禄文化は、町人がそのにない手になったのである。



〇月返り美人(菱川師宣、東京国立博物館蔵)



〇舞台(菱川師宣、江戸区資料館蔵)



〇風神雷神図屏風(伝墨江遺傳、徳仁寺)



町人の文化 江戸時代も17世紀の半ばから18世紀のはじめごろ、大阪や京都の上方を中心に商業が発達し、町人が力をもってくると、文化のようすが大きく変わってきた。

大阪の町人井原西鶴は、「日本永代蔵」という小説に、みずからの才能と努力で成功する町人のすがたを、「大商人になった女性」の物語として紹介している。このような小説は、浮世草子とよばれた。人々のあいだでは、歌舞伎や人形浄瑠璃が流行し、近松門左衛門はその脚本に多くの名作を残した。松尾芭蕉は俳諧を芸術に高め、人々に広めた。

京都の俵屋宗達は、装飾画に新しい流れを生み出した。江戸の菱川師宣は、浮世といわれた江戸に見られる町人の風俗を好んでえがいた。浮世絵のはじまりである。浮世絵は、やがて、版画として大量に印刷され、安い値段でたやすく手に入れることができるようになり、多くの人たちに愛好された。これまで公家や大名のためにえがかれることが多かった絵画も、人々の身近なものになった。

このように、元禄文化は、町人がそのにない手になったのである。



〇月返り美人(菱川師宣、東京国立博物館蔵)



〇日光東照宮(栃木県、世界遺産) 豪華な建で物で、陣山文化を受けついでいる。

原見番号 54 に関連した修正 (当該箇所写真を配置するため割付を変更します。)



〇「神奈川沖浪裏」(葛飾北斎、東京国立博物館蔵)さまざまな高士のすがたをとらえた46枚の図巻、「富嶽三十六景」の一つ。



〇江戸の出版元(日本書局蔵) 十返舎一九や滝沢馬琴を生んだ高士の店先。

庶民の文化 18世紀の末から、19世紀のはじめの文化・文政のころになると、文化の中心は上方から江戸に移り、地方にも広まって、町人や農民の多くが文化をたしなんだ。これを化政文化という。

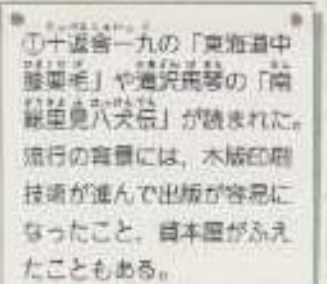
社会の不安を反映して、元禄文化のような清新さはなくなり、こっけいや皮肉が喜ばれるようになり、政治や世相を風刺した狂歌や川柳が流行した。小説も、さまざまなものが読まれた。

浮世絵も、美しい版画として大量につくられ、錦絵として広く売り出された。鈴木春信や喜多川歌麿は美人画、葛飾北斎や歌川広重は風景画の画家として、それぞれ特色を発揮した。浮世絵は、ゴッホやモネなどの画家を魅了した。

人々は、芝居小屋や寄席に出かけ、歌舞伎や落語を楽しむようになった。祭礼などのときに舞台をつくり、芝居を演じた村もあった。神社や寺院の縁日や、盆の行事などの年中行事も楽しみの一つとなり、講をつくって、伊勢神宮や富士山へお参りすることもさかんになった。庶民の中には、読み・書き・そろばんを身につけ、俳諧をたしなむ人もいた。与謝蕪村や小林一茶などは、そうした人々に支えられていた。



〇寺子屋のようす(渡辺崋山筆「一掃百録」、愛知県田原市教育委員会蔵)



①十返舎一九の「東海道中膝栗毛」や滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」が読まれた。流行の書物には、木版印刷技術が進んで出版が容易になったこと、資本屋がふえたこともある。



〇「神奈川沖浪裏」(葛飾北斎、東京国立博物館蔵)さまざまな高士のすがたをとらえた46枚の図巻、「富嶽三十六景」の一つ。



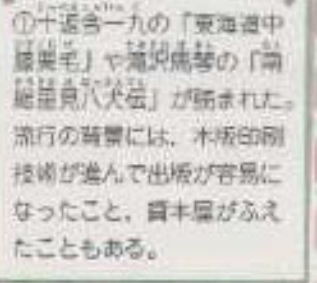
〇寺子屋のようす(渡辺崋山筆「一掃百録」、愛知県田原市教育委員会蔵)

庶民の文化 18世紀の末から、19世紀のはじめの文化・文政のころになると、文化の中心は上方から江戸に移り、地方にも広まって、町人や農民の多くが文化をたしなんだ。これを化政文化という。

社会の不安を反映して、元禄文化のような清新さはなくなり、こっけいや皮肉が喜ばれるようになり、政治や世相を風刺した狂歌や川柳が流行した。小説も、さまざまなものが読まれた。

浮世絵も、美しい版画として大量につくられ、錦絵として広く売り出された。鈴木春信や喜多川歌麿は美人画、葛飾北斎や歌川広重は風景画の画家として、それぞれ特色を発揮した。浮世絵は、ゴッホやモネなどの画家を魅了した。

人々は、芝居小屋や寄席に出かけ、歌舞伎や落語を楽しむようになった。祭礼などのときに舞台をつくり、芝居を演じた村もあった。神社や寺院の縁日や、盆の行事などの年中行事も楽しみの一つとなり、講をつくって、伊勢神宮や富士山へお参りすることもさかんになった。庶民の中には、読み・書き・そろばんを身につけ、俳諧をたしなむ人もいた。与謝蕪村や小林一茶などは、そうした人々に支えられていた。



①十返舎一九の「東海道中膝栗毛」や滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」が読まれた。流行の書物には、木版印刷技術が進んで出版が容易になったこと、資本屋がふえたこともある。



〇舞台(復元模型、江東区深川江戸資料館蔵)